

実践 (概要)	<p><u>身体障がい者連合会、学校、社協の共同でポッチャ交流会を実施。事前の導入及び体験学習から学んだ“自分にできること”を実践する場として、実際の障がいを抱えながら生活されている方との交流を行った。</u></p> <p><u>また、障害の有無や年齢差などによって区別されることなく取り組むことができる“ユニバーサルスポーツ”の存在を知ってもらう。</u></p> <p>※詳しい情報は、こちらから <u>大村市社会福祉協議会・萱瀬小学校（実践）</u></p>
所感 (概要)	<p><u>社協と学校の二者だけで完結することなく、地域のあらゆる団体と共同で福祉教育に取り組むことによって学習内容の幅を大きく広げることができた。また、児童に対し「実践の場」を提供することができたことで、児童らは“原体験に基づく福祉の学び”を得ることができたのではないかと考える。</u></p> <p>※詳しい所感は、こちらから <u>大村市社会福祉協議会・萱瀬小学校（所感）</u></p>
リンク	<p>・<u>令和7年度 第2回地域共生教育担当者会議資料（大村市社協作成分）</u></p> <p>※HP や広報誌等事例の参考になるもの。</p>

萱瀬小学校とともに PG（導入準備）＜大村市社会福祉協議会＞

①期間 令和7年5月 ～ 令和7年10月

②関わった人 7人 社協 学校 行政 施設
 その他（ボランティア・当事者団体）

③導入準備内容・スケジュール

日付	コマ数	対象	項目	内容
5月初旬		先生	実施依頼	萱瀬小学校の先生から電話にて福祉教育の実施依頼を受ける。
5月14日		先生	打合せ	学校側のニーズをヒアリングするとともに、実施可能なコマ数を確認。ヒアリング内容を基に後日実施プログラム案を提示する。
5月29日	1	児童	導入学習	「福祉（ふくし）ってなんだ？」実施
7月8日		ボラ職員	打ち合わせ	・折り紙ボラ体験の進め方の確認 ・当日実施する体験内容のすり合わせ（折り紙の折り方指導含む）
7月16日	3	児童 地域住民	体験・ミニ実践	・ボランティア講座 ・ボランティア体験（実際に地域の方々へボランティア実践を行う）
9月25日	2	児童	体験	当事者体験（車いす／マスク／高齢者）
10月23日：実践へ（当事者との交流会）				

④実施計画

概要	実施日	学習方法とねらい
導入	5月29日	◆『福祉（ふくし）ってなんだ？』 内容：「福祉」の言葉の意味を理解しイメージを膨らませる。 みんなが思う福祉の行動は何か考える。 （ねらい） その後の体験（実践）での学びを具体化するために、前段として福祉の全体像を理解してもらう。
体験	7月16日	◆『ボランティアをやってみよう』 内容：ボランティア講座を通してボランティアの全体像を学ぶとともに“地域の方々の笑顔にするボランティア”（折り紙ボランティア）を体験する。 ※1：ミニ実践として、子どもたちの活動を実際に地域の方々へ届け、その様子や反応を子どもたちへフィードバックする。（地域のボランティアに協力依頼） ※2：7月より開始されるサマーボランティアプログラムへ

		<p>の参加を促し、さらなる実践の場の提供に努める。</p> <p>(ねらい)</p> <p>ボランティアに触れるきっかけを作ることで、その後の自発的な活動参加を促すとともに、「今の自分にできること」で支え手として活躍できるということを体感してもらう。</p>
体験	9月25日	<p>◆『当事者を体験してみよう』※車いす/アイマスク/高齢者</p> <p>内容：車いすやアイマスク、高齢者疑似体験セットを装着して、実際の当事者の生活を体験する。また、それと同時に<介助者>の役割を経験しながら、こういった声掛け、働きかけが必要なのかを考える。</p> <p>(ねらい)</p> <p>高齢の方や障害のある方の「ふだんの暮らし」を体験する中で感じた気づきを基に、自分にできるお手伝いが何かを考える。</p>
実践	10月23日	<p>◆『ユニバーサルスポーツをやってみよう』</p> <p>内容：身体障がい者連合会、学校、社協の共同でボッチャ交流会を開催する。</p> <p>これまでに学習してきた内容を、障がい当事者との交流の中で実践し、理解を深める。</p> <p>(ねらい)</p> <p>日常で関わることの少ない障がい当事者との交流を通じて他者理解の心を育むとともに、地域共生社会の実現に必要な【多様な関わり方】の一つとしてユニバーサルスポーツを知る。</p>
振り返り	11月21日	<p>◆振り返り</p> <p>『グループワーク』</p> <p>内容：これまでの学習で得た感想や発想をグループで共有し、これからの生活で「なにを意識していきたいか」を考えるとともに、具体的な福祉の行動目標を設定する。</p> <p>(ねらい)</p> <p>これまでの学習を通じて得た学びを他者と共有することで理解の幅を広げる。</p> <p>また「何を意識していきたいか」を主体的に考え、グループ間で発表しあうことで行動化を促進する。</p>

萱瀨小学校とともに PG（導入） <大村市社会福祉協議会>

①日時 令和 7年5月29日

②場所 萱瀨小学校 教室

③関わった人 3人

（ 社協 学校 行政 施設 その他（ ）

④活用した機材・準備物

・モニター ・パソコン ・ワークシート

⑤内容

導入	5月29日	◆『福祉（ふくし）ってなんだ？』 内容：「福祉」の言葉の意味を理解しイメージを膨らませる。 みんなが思う福祉の行動は何か考える。 （ねらい） その後の体験（実践）での学びを具体化するために、前段として福祉の全体像を理解してもらう。
----	-------	---

萱瀬小学校とともに PG（体験）＜大村市社会福祉協議会＞

①日時 令和7年7月16日・令和7年9月25日

②場所 萱瀬小学校 教室及び体育館

③関わった人 28人

（ 社協 学校 行政 施設

その他（折り紙ボランティア／福祉体験コーナー／北地区第2民生委員／給食ボランティア）

④活用した機材・準備物

〈7月16日〉

・モニター ・パソコン ・書画カメラ ・折り紙 ・画用紙 ・カラーペン ・はさみ ・のり

〈9月25日〉

・スクリーン ・パソコン ・車いす ・アイマスク ・高齢者疑似体験セット ・コーン ・新聞紙

・小豆 ・紙皿 ・お箸

⑤内容

<p>体験</p>	<p>7月16日</p>	<p>◆『ボランティアをやってみよう』 内容：ボランティア講座を通してボランティアの全体像を学ぶとともに“地域の方々を笑顔にするボランティア”（折り紙ボランティア）を体験する。</p> <p>※1：ミニ実践として、子どもたちの活動を実際に地域の方々へ届け、その様子や反応を子どもたちへフィードバックする。（地域のボランティアに協力依頼） ※2：7月より開始されるサマーボランティアプログラムへの参加を促し、さらなる実践の場の提供に努める。</p> <p>（ねらい） ボランティアに触れるきっかけをすることで、その後の自発的な活動参加を促すとともに、「今の自分にできること」で支え手として活躍できるということを体感してもらう。</p>
<p>体験</p>	<p>9月25日</p>	<p>◆『当事者を体験してみよう』※車いす/アイマスク/高齢者 内容：車いすやアイマスク、高齢者疑似体験セットを装着して、実際の当事者の生活を体験する。また、それと同時に＜介助者＞の役割を経験しながら、こういった声掛け、働きかけが必要なのかを考える。</p> <p>（ねらい） 高齢の方や障害のある方の「ふだんの暮らし」を体験する中で感じた気づきを基に、自分にできるお手伝いが何かを考える。</p>

萱瀨小学校とともに PG（実践）＜大村市社会福祉協議会＞

①日時 令和7年10月23日

②場所 萱瀨小学校 体育館

③関わった人 6人

（ 社協 学校 行政 施設 その他（身体障がい者連合会））

④活用した機材・準備物

・ボッチャセット ・ホワイトボード ・ボッチャルールシート

⑤内容

実践	10月23日	<p>◆『ユニバーサルスポーツをやってみよう』</p> <p>内容：身体障がい者連合会、学校、社協の共同でボッチャ交流会を開催する。</p> <p>これまでに学習してきた内容を、障がい当事者との交流の中で実践し、理解を深める。</p> <p>（ねらい）</p> <p>日常で関わることの少ない障がい当事者との交流を通じて他者理解の心を育むとともに、地域共生社会の実現に必要な【多様な関わり方】の一つとしてユニバーサルスポーツを知る。</p>
----	--------	--

萱瀨小学校とともに PG（所感等） <大村市社会福祉協議会>

1、所感

従来の体験学習のみならず、事前学習や実践、振り返りまでをしっかりと時間をかけて実施したことで、福祉の表面的な部分だけでなく本質的な部分についても理解することができたのではないかと考える。特に学習前は「福祉の対象者＝障がい者／高齢者」といった見方が強かった児童らも、学習を重ねるごとに「自分たちも福祉の中にいるんだ」という意識変容が見られたことから、本プログラムの一定の効果を感じることができた。

また、これまでは「学校×社協」の二者で福祉教育に取り組んできたが、本プログラムにおいては地域住民やボランティア、当事者団体など様々な方との共同実践を展開した。それによって、学習内容が学校内にとどまらず、地域にもベクトルを向けた活動へと発展させることができたと考える。このことから、今後さらなるプログラムの開発・発展を目指すにあたっては、多様な機関との共同実践が重要であるということが分かった。

本プログラムを完遂することができたのは、学校側の「理解」と「積極的な協力」があったからだと考えている。まず、福祉教育ついて両者が共通理解を持ってスタートすることができたため、本会が関わっていない授業においても先生主導のもとで学習が展開されていた。また、障がい当事者とのポッチャ交流会のためにと、体育の内容をポッチャに切り替えて事前練習を複数回行っていただくなど、児童らの理解を深めるために多大なご協力をいただくことができた。

2、今後の取り組みについて

本プログラムの実践を通じて、改めて福祉教育プラットフォームの重要性を感じることができた。現状は各プログラムに合わせて「1プログラム1プラットフォーム」といった流動的な体制で福祉教育に臨んでいるが、今後は大村市内における固定的な福祉教育プラットフォームの構築に向けた働きかけを実施していきたいと考えている。

また、本会が実施している現行の福祉教育プログラムでは依然として「サービ斯拉ーニング」の視点が薄いと感じている。しかしながら、今回の実践により“福祉教育に地域の団体が関わる”という前例を作ることができたため、これをキッカケとしてサービ斯拉ーニングを取り入れたプログラムへと発展させていきたい。